



グラフィックデザイナー

Yさんは高校生からの常連さんで、今はデザイン会社に勤める駆け出しのデザイナーさんです。

久しぶりに訪れた彼女の仕事振りに感心したのと同時に、同世代が運営するデザイン事務所の素晴らしさが伝わってきました、僕がその業界にいたころは昼夜を問わず働くことが常識でしたが、彼女の会社はちゃんと夕方に仕事が終わっているようです。

これは何をおいても素晴らしいことなんです、この業界においては。

保育士

店長聞いてくださいよ、と常連のOさん。彼女は保母さん、今風に言うと保育士だろうか。

教育の現場に現れるモンスターはTVなんかでおなじみなんだけどまさかこんなところまでって話なんです、いわゆるモンスターペアレンツや園内の派閥や上司からのパワーハラスメント。

聞けば聞くほど難しい話が山積みの状態で解決の糸口さえ見つけられませんでした。

特に職員の待遇の悪さいや、格差、正規職員とその他の職員の待遇の差、同じ仕事をしていても給与などの差がありすぎます。

政治の季節を迎え各政党好き勝手正論をぶってますが、彼女たちの声を聞いてすぐに形として改善できると断言できる政党があれば清き一票投じさせていただきますよ。

設備建材販売

僕と同世代の彼女は未だ独身でさまざまな業種の職人さんに建築施工材料を販売しているが、未だ独身の理由は男性恐怖症によるものだという、すべてがそうだとは言えないけれど職人は押し並べて気難しくてわがままで品がない。

工務店などに頼むと職人と接することはないが経費節減のためにそれぞれの職人に仕事を頼むと明らかに機嫌の悪い職人がやってくることが多い、なぜなら注文が多いからなのとこちらが素人だということ。

彼女はそういったわがままな職人たちの機嫌を取り愚痴を聞いてやるうちに男の本質やらがわかってしまったらしく、いまだ独身なのだそうだ。

広告カメラマン

お客さんではなくて、僕自身がかつて勤めた仕事の話です。

チラシの写真や電車のつり広告とか旅行に行きたくなるようなイメージ写真を撮っていました。

20年近くやっていたんですけど辞めてしまったのはなぜでしょう。

結局才能がなかったんですが、デジカメの登場が大きかった気がします。

宣伝部の人にデジカメの画像を見せられ、こんな風にとってほしいと言われたときに存在を否定された気がしたのがきっかけかも知れません。

カメラマンは撮影技術だけではなく感動のきっかけになる仕掛けも自分の仕事だと思っていたので、単なる技術屋さんには甘んじる事が出来なかったのでしょうか。

今思えばそんな偉そうなことを言える実力など無かったのですが、そんなきっかけでやめてしまいました。

医師

よく来られるお客様のお嬢さんは京都の土産物屋さんで働いておられます、ある日そこへ土産物を買いに来た外国人に妙な事を聞かれたそうです。

彼は医者らしくていくつかの質問（問診）の後彼女に、都内の大学病院を紹介して帰って行ったという。

自覚症状もなく、彼の言う病名も初めて聞くものでした、半信半疑のままその大学病院を彼女は訪ねました。

初期でしたが外国人医師の言った病気であることが分かり、彼女はすぐに手術を受け、現在は完治していると聞きました。

初見で見抜く医者としての素質もさることながら病院外で初対面の人にあなたは病気ですと言っ
てのける彼の精神力に脱帽。

確かに気の弱い医師には診てもらいたくないですけどね。

モデル事務所社長

ずいぶん昔の話ですけど、僕がスタジオカメラマンのころ、よくオーディションに顔を出してくれていたモデル事務所の社長さんの話です..

実は彼女自身現役のモデルでもありとてもきれいな社長さんでした。

ある日仕事の帰りに少し時間があつたので彼女と話していたんですが、彼女のお父さんが会社をいくつか経営している事や、自分もこのモデルクラブをもっと大きな会社にしていきたいと言った野望を持っている事を聴かせてもらい、最後に何かアドバイスがあれば聞かせてほしいと言われてました。

貧乏雇われカメラマンとしては、正直な意見として、先ずお父様の存在をかくして大きな野望も語らずに今日乗って来たこの辺であまり見ないベンツのスポーツカーではなくてミニクーパーなんかで営業したほうが、この辺では受けがいいと思うと伝えました。

今から思えば少し嫉妬していたのかも知れませんね。彼女の全てに。

ニット作家

この間巨人のコーチが亡くなられたでしょ、同じ病気なのよ、私。

そう診断されてもね危険な手術なんで健康なうちには手が出せないの、倒れたら一か八か手術してくれるんだって、でもね、そこの病院の先生は脳外科の権威だって言うからまあお願いするしかないんだけどね。

だからって言うわけじゃないけど、生きていうちに好きなおしゃれを楽しんだり、好きなニットを編んだりして楽しもうって思ってるわけ。

それはそうと私の編んだニットこのお店に置いてもらえないかなー、外国の糸で編んだとてもきれいセーターなんだけど。

この不況で店の縮小も考えていた僕は快い返事が出来ずに10月ごろにまたお話が聴ければとやんわりとお断りしたけれど、本当は、こんな作家さんの服や雑貨で店をいっぱい出来ればどんなに素敵なんだろうと、お帰りになられてから、少ししみりと考えていました。

ニット作家さん絶対に長生きしてくださいね、一緒に頑張れる日を願っています。

元コピーライター現立体イラストレーター

確かに、自分の分野で勝負するのはちょっと抵抗あるよね。

彼女は元コピーライターで本来文章やさんなんで、いま僕がいたずらに書いている雑文投稿サイトにはちょっと腰が引けている。

僕だって写真で勝負するのは勘弁してもらいたい、だって先入観があると期待値が高すぎてその結果バッシングに逢う確率が非常に高いからだ。

僕らは時代にそぐわなかったんだと前職を捨てた理由を自分に言い聞かせてはいるが、はたして、、、。

フォトグラファー、コピーライター、イラストレーター、いずれもこれからのたたき台になるための仕事をするを課せられた仕事、一粒の例外を除けば。

本来僕らの仕事は代書屋のようなものでその人が求める世界観を代わりに表現するのが仕事だったのにみんな器用になって来たのと機材の発展発達で表現のハードルが極端に下がってしまったもんだから代書屋は必要なくなってきたというものが現実かもしれない。